



Title	キーツの内部世界
Author(s)	本堂, 正夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 10, 185-199
Issue Date	1961-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33270
Type	bulletin (article)
File Information	10_P185-199.pdf



[Instructions for use](#)

キーツの内部世界

本
堂
正
夫

キーツの内部世界

本 堂 正 夫

目 次

- 一、神秘、秘密——浪漫的探究の刺戟剤
- 二、無意識な状態の自覚——キーツにおける知識の意味
- 三、内部の眼——浪漫的世界における認識の手段

(一) 神秘、秘密——浪漫的探求の刺戟剤

キーツの詩人としての体験はどういう性格を帯びていたのであろうか。それは一口に云えば、啓蒙主義の表面的な世界の意味、人生の意味をつき破つて、一つの新しい領域に到達したことであろう。その精神の領域は単純な現世の把握からは遠ざかつたものであり、もはや平面や限界が支配していない世界である。キーツによれば、地上の世界では、天と地との快い色彩 *“pleasant hues”* はことごとく褪せはててしまい、野原や日向の林間空地は疫病の光 *“pestilent light”* に充滿しているが、キーツの精神世界はむしろ快い色彩によつて次元の深さがはつきり描かれて来る世界であり、如何なる疫病の光もそれを拭い去ることの出来ない世界である。魂の世界は浪漫派の詩人とつて

一つの共感的な風土として眼の前に現われる。魂の世界は實際発見されたのだが、しかし未だ無限に大きな、知られざる土地でもあつた。その新しい世界の覆いを取り去り、認識することによつて魂の深部へ滲透して行くことが出来る。然しその道の終点には尚未知なるもの、解決されざるものが残っている。従つてここに、ロマンティックな、未知なるものを知ることが欲する本能的な欲望が生じる。それは普通の知識ではなく、秘密と知識とが不思議に混り合つた予感的なものであるといえるだろう。この予感が暗闇の中に覆われていなければならないほど、それを無意識の暗黒から取り出そうという衝動は益々強くなる。未知なるものは神秘の重荷として若いキーツの上にのしかつた。そのことをキーツは手紙の中で、*“burden of mystery”* と呼んでいる。然し

一方から云えば「真正の秘密」は浪漫的探究者にとつては本来の刺戟剤となる。何故なら秘密こそ詩人を刺戟する生産力であるからだ。キーツの爲したことは、この神秘の殿堂への放浪だつた。キーツはこの最後の領域に前進するために力を尽した。彼の同時代の人々の中で、キーツほど不可解なものの中にある畏懼を鋭く感じた者はないだろう。J. H. Reynolds 宛のキーツの手紙には、この体験が切実に語られている。それは未知なるものの中に落ち込んで行く者の感情であつて、キーツはそれを殆んど肉体をもつて体験したのであつた。

“falling continually ten thousand fathoms deep and being blown up again without wings and with all the horror of a bare-shouled creature.”

未知なる世界に落ち込んで行くときの畏懼は「幾万尋も深く深く不断におちて行つて、再び吹き上げられても、翼もなく、肩はむき出しのまま恐ろしい限り」である。自分に知られている地盤に身を置こうとする彼の望み、秘密に充ちたものと、事実及び理性とを結びつけようとするキーツの望みは非常に強かつたので、その欠除即ち知識を

伴われない直覚はキーツにとって“bare-shoulder'd creature”(翼を持たない者)の感情を抱かせた。然し一方から云えばそういう体験によつて真の詩人を特徴づける能力が獲得される。キーツの書簡には次のような言葉がみられる。

“Several things dovetailed in my mind, and at once it struck me, what quality went to form a man of achievement, especially in literature, and which Shakespeare possessed so enormously—I mean Negative Capability; that is when a man is capable of being in uncertainties, mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact and reason”

「いくつかがことが私の心のなかでつながり合つて、とつさに思いついたことは、特に、文学において、えらい仕事をし遂げた人を構成する性質、シニイクスピアが多量にもつていた性質——私が消極能力という性質のことです。この消極能力というのは、人が、事実や理性などをいらだたく追求しないで、不確定、神秘、疑惑の状態にとどまっていられるときを云うのです。」

このように“Negative capability”とは事実や理性を苛立たしく求めようとするのではなく、不確かなもの、神秘、疑惑の中にとどまることができる状態をいうのである。詩人は真の生命を事実と理性から独立した世界から受けとるのだといえるだろう。その事実と理性から独立した世界を彼は“Penetrium of Mystery”(神秘の秘園)という言葉で表現する。その神秘は然し合理的な公式によつては表現されないで、むしろ詩の中に表現される。詩はもつぱらこの神秘の秘園の表現である。詩人が彼の魂の世界を覆うているヴェールを取り除くことに成功するなら、その神秘は強められた姿で、つまり驚異中の驚異として現われる。真の芸術の榮譽は、だから、純一な想像的な心“simple imaginative mind”の深みから、あの神秘的な真

理を汲みとることである。その神秘的な真理は、詩の中におけるその秘密に充ちた心象(イメージ)から分離され得ないものである。

ではその神秘的な真理、芸術上の真理とは何であらうか。それは単なる理性によつて到達されるものではなく、芸術の強度、熱度と深い関係を持つている。キーツは書簡の中で次のようにいう。

“The excellence of every art is its intensity, capable of making all disagreeables evaporate from their being in close relationship with Beauty and Truth, Examine ‘King Lear’...”

「あらゆる芸術の卓越性は、それが美と真理に密接な関係を保つことによつて、あらゆる不快なものを蒸発(evaporate)させることのできるその強度にある。——「リア王」をよく見給え。」

熱烈さと真理とは同一の芸術作品から生ずるが、しかし人間の魂の諸力が合する領域においてだけ、そのことは可能である。ただ、あらゆる不純物を放棄するときのみ、詩人にとつて、内部の世界は現われる。キーツは正確な認識を得ることを願つており、その正確な認識の欠除は彼をして時折、「存在の苦痛」“the pain of existence”を熱及び熱病として“heat and fever”殆んど肉体的に感じさせたのだ。が、しかしキーツは結局、単なる事実を認識するのではなく真実な芸術家としての根拠だけを認識した。

“...the truth of imagination — What the imagination seizes as beauty must be truth whether it existed before or not —”

「想像の真理——想像力が美としてとらえるものは真理でなければなりません。——以前に存在したもので、しなかつたものでも。」この故に想像力の確実性、信憑性“authenticity of the imagination”ということが根拠をもつようになる。想像力は人間の無意識の世界へ通じる進路を有している。その無意識界においては、意識の世界では分裂していた人間の諸力が、尚もその創造的一致を示しているのである。

る。この人間の創造的諸力が一致をするその原型“prototype”を眞の詩人は表現する。

“and very few eyes can see the Mystery of his life—a life like the scriptures, figurative—which such people (i. e. they are very shallow people who take every thing literally) can no more make out than they can the Hebrew Bible—”

「そういう生涯の秘密を見ることが出来る人は極めて少ないのだ。——聖書のような生涯は象徴的であつて、——人々がヘブライ語の聖書を理解することができないように、そういう生涯を理解することもできないのだ。」とキーツは手紙の中でいう。神の秘密は聖書の中に隠されており、しかも同時に、信じる者にとつては、即ち、あらゆる不快なものを蒸発させることの出来る人にとつては光り輝くように、浪漫的な詩人は彼の眞実を象徴の中に包むのである。その象徴は、すべてのものをただ言葉通りに受けとる人にとつては近づき難いものである。何故ならばロマンティックな眞実はその秘密から解き離すことが出来ないものであるからだ。だから美はただその象徴においてのみ語り得るのである。浪漫派の詩人にとつてはものの意味は、ものそのものを示す記号以上のものである。だから「詩の芸術と神秘」“the art and mystery of poetry”に關係を持たないようなあらゆる知識は詩の出発点ではない。その詩の出発点というのは、美と眞に密接に關係しているものなのだ。“in close relationship with Beauty and Truth”。

事実と理性“facts and reason”によつて測られるならば、想像力に富んだ詩人や浪漫的詩人はただ中途半端な知識“half-knowledge”しか所有していないことになるだろう。これに關連してわれわれはキーツがコールリッジについて行つた批評を想起しなければならぬ。

“Coleridge, for instance, would let go by a fine isolated veris-

mitude caught from the Penetratum of mystery, from being incapable of remaining content with half-knowledge.

This pursued through volumes would perhaps take us no further than this, that with a great poet the sense of Beauty overcomes every other consideration, or rather obliterates all consideration.”

「たとへばコールリッジなら、神秘の秘園から捉えた、美しい、孤独な、眞らしいもの（突然閃く予感）を、不徹底な知識に満足できないために、逸して終うことでしょう。われわれがこの思想を幾巻をも通じて追求するとしても、結局、つぎの文句に云いつくされます。即ち偉大な詩人にとつて、美感は、あらゆる他の考慮よりも強いが、それともあらゆる考慮を抹殺する⁽¹⁹⁾。」

キーツは不徹底な知識“half-knowledge”疑惑“doubts”不確實“uncertainties”神秘“mysteries”の薄明によつて取り囲まれている人間を、神秘の秘園の近くに立つてゐるといふ信念を持つことの出来ない人間に對立せしめてゐる。ちなみにコールリッジ批評における「眞らしいもの」(突然閃く予感)はキーツの「不徹底な知識」あるいは「消極能力」“half-knowledge” (i. e. Negative Capability)と反對なものとは考えられない。むしろ接近した性質を持つものである。かくしてキーツは“Penetratum of Mystery”へ通じる扉を開くために、解剖的、分析的な論理よりも、もつと強力な力を既に予感した。このような信念をもつて詩人は彼の姿を描き、固有の道を迎へようとする。だが詩人の固有の道は詩人を自己自身の中へと連れ戻すだろう。そしてこの神秘の秘園“Penetratum of Mystery”の認識、即ち、あの非合理的な世界の認識は、詩人の体験によつてなし遂げられるのだが、然しその体験というのは、明瞭な意識の明るい光の中に映し出されるのではなく、むしろ魂の深い、薄明的な領域に映るものである。そこには詩人の神殿が隠されている。その秘密に向つてもつばら浪漫

的な憧れは向けられる。その憧憬はしばしば世界大に拡大されるが、根底においては内部の世界への憧れ、いわば故郷への憧れといつてもいいだろう。そして遙かなるものへの憧れというのも、実はただ意識された表面の世界から遠ざかることを望む気持を指すのであろう。

この憧れの領域へ入る鍵をもつているものは眠りである。キーツにあつては、詩人の放浪は眠りの、夢の、またあらゆる合理的な羈絆から解放された幻想の、薄明と黄昏の世界のなかへ向けられる。

Endymion はこのようなキーツの思想の、最初の詩的実現であるが、そこでは未知なる力 “Unknown” power との接触が、また眠りと夢との秘密に充ちた覆いがある。その眠りと夢の不可思議な覆いの、驚くべき力から、キーツは神秘の啓示を期待した。それはキーツにとつて、「神秘の秘園」への鍵である。

O magic sleep ! O comfortable bird,
That broodest o'er the troubled sea of the mind
Till it is hush'd and smooth ! O unconfin'd
Restraint ! imprisoned liberty ! great key
To golden palaces.

「ああ、魔法のような眠りよ！ ああ快い鳥よ！

心の擾乱の海を蔽い懐いて、ついにそれを静かに平かにする鳥よ！

ああ無際限なる制限よ！ 監禁されたる自由よ！

黄金の宮殿の偉大な鍵…」

キーツの夢は決して単なる泡沫ではない。キーツは彼の永遠の喜びの根拠である彼の秘密を手離さない。

but still will keep
A bower quiet for us, and a sleep
Full of sweet dreams, and health, and quiet breathing.

そはつねにわれらのために

静けき憩いの木蔭を保ち、また、うまし夢と健康と静かなる息吹とに満つる眠りを保たん。」

聖なる眠りが支配している世界との接触を *Endymion* は示している。*Endymion* には、既に始めからこのような夢の体験が歌われている。この眠りが支配している世界との最初の出会いは *Endymion* にこの世界を完全に知ろうとする望みを呼び起す。*Endymion* は樹蔭に眠つて蘇生したが、更に次のような詩句が続く。

but I will ease my breast
Of secret grief, here in this bowery nest.

「しかしこの木蔭の巢で、ひそかな悲しみをもつ私の胸をやすめよう。」

...I fell asleep. Ah, can I tell
The enchantment that afterwards befell ?
Yet it was but a dream ; yet such a dream
That never tongue, although it overteem
With mellow utterance, like a cavern spring,
Could figure out and to conception bring
All I beheld and felt.

「そして私は眠つてしまった。ああ、私は

その後起つた魅惑を語ることが出来ようか

だがそれは単に夢だつた、だがこうした夢を

たとえ和らかに熟した表現で充滿する舌でも、

到底云い現わすことは出来まい。私の見たこと感じたことの手へ

てを概念にもたらすことは出来まい。」

夢はわれわれに超地上的な世界についての知識を与える源泉である。この超地上的な、秘密な世界は “secret grief” (ひそかな悲しみ) のように *Endymion* の上にのしかかる。われわれはこの悲しみがキ

イツの上かのしかかるのだといつてもいいだろう。何故ならキーツはこの状態を自身で親しく体験したからである。それは先に挙げた「H. Reynolds 宛の手紙に書かれているが、*Endymion* の “dream within dream” (夢の中の夢) の描写とのおぼろげな相似がみられる。手紙においても詩においても、われわれは下降して深く水中に潜る心象と、再び空中高く持ち上げられる心象とが出会い、“fathom” という言葉も深さの尺度としてくり返し現われる。手紙においてキーツはこの上昇と下降の気持を翼のないものの恐怖 “horror of a bear-shoulder'd creature” として表現する。詩において *Endymion* はそれを人間の体験能力にはあまりに大き過ぎるものとして表現する。

Oh! 'twas too much;

Methought I fainted at the charmed touch,

Yet held my recollection, even as one

Who dives three fathoms where the waters run

Gurglings in beds of coral: for anon,

I felt upmounted in that region

Where falling stars dart their artillery forth,

And eagles struggle with the buffeting north —

That ballances the heavy meteor-stone: —

「ああ！ それは耐えきれなかつた

その魅力ある手に触れて私は気も遠くなると思われたが、

それでも私は気を取り直した。まるで三尋も深く

潮が珊瑚の海床に逆巻き流れるところへ

潜つて行く人のようだった。なぜならまもなく

私はあの上空に昇つたように感じたのだ、

そこは落ちる星くずが大砲を放つて、

その重たい流星の隕石を宙に支えるほどの

北大文学部紀要

打ちのめすような北風と荒鷲らが闘う処だ。」

われわれは更に *Endymion* の次のような個所に注意する。

Thus spake he, and that moment felt endowed

With power to dream deliciously; so wound

Through a dim passage, searching till he found

The smoothest mossy bed and deepest...

「彼はこういつた瞬間、甘い夢をみる力を

与えられたように感じた。それで薄暗い路を

曲り曲つて、まどろむ場所を探ね、ついに

いと滑らかなでいと奥深い苔の寝床を見出した。」

更に次のような個所も見られる。

But still he slept. At last they interwove

Their cradling arms, and purpos'd to convey

Towards a crystal bower far away.

「それでも彼は眠つていた。ついに妖精たちは

摇篮のように腕を組み合せて、彼を遠く

透明な安息所に運ぶことにした。」

このようにキーツにあつては神秘の世界は様々な迷路を通つて達せ

られる。*Endymion* の世界への入口は夢という灰色の鍵によつてあけ

られる。そこでは眠りと神秘的なもの、秘密に充ちたものが結びついて

いる。

There is a sleepy dusk, an odorous shade

From some approaching wonder,

「何か近づくと不思議なものから発する

馨る陰が、眠たくする暗がりがあつて、」

キーツにあつては眠りと夢の状態が、神秘の秘園という概念で把握

されている状態と緊密に結びついていることが知られる。その眠りは

Endymion における滑かな半透明の霞の輻であり、*“His litter of smooth semilucid mist, 天界の門へと通じている。Now was he slumbering towards heaven's gate, 183”*

夢は魂を保護し、包む故郷である。その中では束縛されていた想像力は生活の規則性や日常性から解放されて蘇る。想像力は最も聖なるものの入口に到達し、そこでは美と真とは同一の女神でなければならない。

キーツにおける「神秘」という言葉は詩人によつて体験された精神的、霊的な空間を表現している。即ち、内部へ向つての、また自己の深部へ向つての精神的転向を表現している。その自己の深部には、もはや相対的な意味ではなく、絶対的な意味だけが相応しいものである。このような絶対を求める心こそ浪漫的な生命感情の本質的な特色であるといつていいだろう。われわれの内部世界はそれ自身が一種の宇宙である。それはそのもの自身の裡に価値を持つていたのであつてわれわれはその宇宙、即ち内部世界に沈潜するのである。このようにして詩人の魂とその力は発見されたが、同時にそれは魂の解放をもたらした。その魂の解放は単なる人間の理解力を超えたものである。それは人間を未知なる世界、不確かな世界の中へと導き入れる。「夢の中の夢」において感覚は未だ嘗つて知られざる高さにまで高められる。即ち内部世界は熱烈で非常に親密なものであるという体験と並んで、内部世界は未知な、不確かなものである、という体験がある。その不確実性はキーツにおいては *“bare-shoulder'd creature”* (翼のないもの) の感情を生み出す。それはどんな孤独も及ばないような孤独な感じであり、云い難い不安に駆り立てられる感じである。このような内部世界はキーツにとつては殆んど拡大された現実となつた。その内部世界が彼に不安と疑惑の感情を呼び起したのである。かくして内部へ向うこの秘密に充ちた道がキーツの道である。そして内部世界

には真実に通じる確実性が存在するという考えと並んで、内部世界の不確実性、不安が横たわつてくる。たとへば *“To Autumn”* 中の *“poppies”* もこのような眠りの世界に誘ひ、奇蹟を行つ、酔わせるような作用を示唆している。内部の秘密のこの沈黙、不確実性がキーツを動かした。彼は *“mystery”* に向つて問いかける。それはこのような暗さからの一つの叫びのように解き放たれる。

Why did I laugh to-night? No voice will tell:

No God, no Demon of severe response,

Deigns to reply from heaven or from Hell.

Then to my human heart I turn at once;

Heart! Thou and I are here sad and alone;

I say, why did I laugh! O mortal pain!

O Darkness! Darkness! ever must I moan,

To question Heaven and Hell and Heart in vain.

Why did I laugh?...

「何故僕は今晚笑つたのだろう？」

どんな声も僕にそれを教えはしない。

きびしい返事をするどんな神も、どんな悪魔も

天国や地獄から答えてはくれない。

そのとき、僕は直ちに僕の人間の心へと向う、

心よ、君と僕はここで悲しく、孤独なのだ、

ねえ、何故僕は笑つたのだろう？ おお、

死の苦しみよ！

おお、暗黒よ、暗黒よ

天国や地獄やハートから答えを求めても空しく

僕はいつも歎かなければならない。」

(二) 無意識な状態の自覚——キーツにおける知識の意味

このように内部の秘密の世界がキーツを動かしたとき、キーツにとって知識“knowledge”は新しい概念を持つようになった。即ち、秘密に充ちたものを体験することによつて、キーツの知識は特殊な意味を持つことになった。この知識の意味の変化——この変化をわれわれは見失わないようにしなければならぬ。キーツにおける“knowledge”をわれわれは誤つて判断してはならない。そのことはキーツが詩の中で歌っている願いを誤解しないためにも必要である。キーツは *Ode on a Grecian Urn* の中で次のようにいう。

“Beauty is truth, truth beauty; — that is all
Ye know on earth, and all ye need to know.”

「美は真である」というとき、啓蒙主義的な“knowledge”の概念は葬り去られる。そこでは合理主義的な要素はどんな役割も演じていない。詩人の生の全体の領域に非合理的な世界観が拡つて、その生の領域を変革する程度に応じて知識にも評価の変更が生じた。新しい知識の概念は価値を変更されたが、それは古い知識の概念を向上させたというようなものではなく、またその本質から云つて、謎めいたものや秘密なものに對立、反對するものではない。むしろ新しい知識の概念は謎めいたものに向けられていくといつていいだろう。浪漫的な知識探究の衝動は秘密をその探究の対象としているが、しかし浪漫的な探究衝動はそれ自身、秘密を愛する気持と知識を求めぬ気持との驚くべき混合から成立しているといつていいだろう。それはキーツにあつては *On First Looking into Chapman's Homer* の中に歌われている。そこでは発見者は荒々しい大胆不敵の臆測をして“with a wild surmise”⁽²³⁾新しいものを予感的にみる。然しこのソネットにおい

ては、たとえば実際の地理的場所としての太平洋の発見が問題となつてゐるのではなく、むしろ探究や知識慾は、人間の固有の内部の世界に向けられている。このことは先に言及した一八一九年のソネット、*Why did I laugh to-night?* が特に明瞭に示してゐる。この詩は一つの手紙と関連して書かれたものだが、こゝでキーツは“knowledge”の概念を直接この詩と結びつけながら書いてゐる。

“...it will show you that it was written with no agony but that of ignorance; with no thirst of anything but knowledge...”

「それ(そのソネット)は無知の苦悩以外のどんな苦悩もなしに、また窮極の知識を求める渴望以外のどんな渴望もなしに書かれたということを示すでしょう。」⁽²⁴⁾

知識は単なる記憶ではない。キーツの知識は百科辞典的な知識の概念からの根本的な訣別によつて生じたものだ。キーツは“knowledge”を“Why did I laugh to-night?”という彼の質問の根拠として考えた。このソネットの中には“darkness”という言葉があるが、これはこの詩が挿入されている手紙の中の“thirst of knowledge”と同じように、このソネットの明瞭な契機となつてゐる。この詩においては、“Darkness — Darkness!”という言葉の意味は明瞭である。それは夜の無意識の世界からやつて来る笑いであつて何故笑つたのかということに對する魂の動機は不可解だ、ということだろう。即ち、内部の秘密に充ちた世界を意味しているのだと思う。キーツは手紙の中で次のようにいう。

“look over the two last pages... It will be the best comment on my sonnet.”

「最後の二頁に眼を通して見給え……それは僕のソネットに対する一番よい批評だ。」⁽²⁵⁾

そして同じ手紙の中で次のようにいう。

“I am however young writing at random — straining at particles

of light in the midst of a great darkness — without knowing the bearing of any one assertion of any one opinion.”

「だが僕は若くて、当もなく無暗に書いている。——そして大いなる暗闇の只中で幾条かの光線を求めて全力を尽している——何か或る見解の或る主張がどういふ位置にあるかも知らずに。」

そして明らかに何の目あてもなく、その数行後につけ加える。

“Though a quarrel in the streets is a thing to be hated, the energies displayed in it are fine; the commonest man shows a grace in his quarrel.”

「往来でのけんかは厭うべきものだが、その際発揮された力（エネルギー）は美しい。最も普通の人間でもけんかの場合には美しさを示す。」

人間の外部の行為の背後にある「発揮された力」「魂の根本的な力」がキーツにとつては重要なのである。その「魂の根本的な力」あるいは「発揮された力」はキーツにとつて、あの「幾条かの光」を形成するものである。それを彼は獲得しようとするのだが、ただこの「幾条かの光」即ち魂の根本的な力だけが彼の詩の対象となるというところを彼はこの手紙の中で明瞭にしようとする。だから、キーツはもう一度彼の考えが正しく理解されるためにこの手紙の中で次の質問をする。

“Do you not think I strive — to know myself?”

「僕が自己を知ろうとして努力しているとは思いませんか？」

George 夫妻宛のこの手紙を、更に画家である友人、B. R. Haydon 宛の手紙が補っている。キーツにおいては“knowledge”と“darkness”との連関は明瞭である。何故なら“Knowledge”への衝動は、「暗闇を愛する気持」“Love of gloom” (Letters, P. 284) から生れるからだ。この点でキーツは知識に関する、従来世間から受け容れられて見解を拒否する。

“Conversation is not a search after knowledge, but an endeavour at effect.”

「会話は知識を求めめる探求ではなくて、効果を求めんとすることである。」

会話の「効果を求めんとする努力」に対してキーツは彼が心に抱いていた「知識」の意味を明瞭に対立せしめる。

“Such things I ratify by looking upon myself, and trying myself at lifting mental weights, as it were.”

「このような物事（知識）を僕は自分自身を見ることによつて、また謂わば精神的な重荷を持ち上げようと試みることによつて是認する。」

キーツは更に次のようにつけ加える。

“I am three and twenty, with little knowledge and middling intellect.”

「僕は二十三歳ですが、殆んど知識もなく、中位の知性しかありません。」

だが一方ではこの乏しい知識が彼に偉大なる着想を持つ満足を与えようという事を告白している。

“the satisfaction of having great conceptions.”

このような魂の満足は表面的な会話にあるのではなく、むしろ人間の内奥の世界そのものの中にある。会話の「効果を求めんとする努力」はそのような満足を破壊するだろう。だからキーツは彼の内部世界の宝が彼にとつて未だ隠されている場所で、また彼が彼の精神的重荷を未だ持ち上げることが出来ないでいる場所で、彼の内部世界の宝を愛したといつていいだろう。何故ならキーツは雲間を洩れる日光のような希望の光を求めて努力すると同時に、内部の「暗闇を愛する心」を育くんだ。その内部の秘密はキーツにとつて文学の世界へ入つて行くための素材として神聖なものに思われた。この気持をキーツは次のように書く。

“I will not spoil my love of gloom by writing an Ode to Darkness!”⁽⁴³⁾

「僕は暗闇へ寄せる歌を書くことによつて、僕の暗闇を受する気持を損わないようにしよう。」

キーツの意味した知識に到達するために、キーツは自己の内部の暗闇に幾条かの光線をもたらすこと、魂のエネルギーを發揮すること、精神上の重荷を持ち上げること等を考えた。然し認識の光を求めめる声は、キーツの初期の思想、即ち夢と秘密を通じて詩人に話しかけて来る超自然的な力の作用と相反するものではなく、それはむしろ詩人の生の神秘 “the mystery of his life” を表現するために、⁽⁴⁴⁾ 内部の世界に入つて行くこととする深い浪漫的憧憬と一致するものである。

知識はキーツにとつては自己を知ることに関立つ限りにおいてのみ意味を持つ。

“Nothing ever becomes real till it is experienced — even a proverb is no proverb to you till your life has illustrated it.”

「何物もそれが体験されない中は現実とならない——諺さえも君の生活がそれを実例をもつて示さない中は君にとつて何の意味もない。」⁽⁴⁵⁾

自己の魂の経験、即ち人間の最も内部の世界が究極の現実、偉大な全体となる。その魂の体験とは個々の、連関のないものの孤立した体験ではなく、大きな全体に於いての体験である。キーツは J. H. Reynolds 宛の手紙の中で次のように云う。

“Every department of knowledge we see excellent and calculated towards a great whole.”

「あらゆる部門の知識は優秀なもので大きい全体のために予め定められていくものと思つて。」⁽⁴⁶⁾

更に同じ手紙の中で次のような言葉も見られる。

“...for I do not see why a mind like yours is not capable of harbouring and digesting the whole Mystery of Law as easily as Parson Hugh does pepins — which did not hinder him from his

poetic Canary.”

「というのはヒュー牧師が豆林檎を平らげて、それがために、詩的なカナリア島葡萄酒を飲む邪魔にはならなかつたように、君のような人が、法律の奥儀をすつかり飲みこんで、消化できぬわけがないからだ。」⁽⁴⁷⁾

キーツにあつてはこのような大きい全体についての体験から決定的な価値の転換が生まれる。その価値の転換とは、あらゆる学術の部門の相互の大きい結合は、結局大きい全体の秘密との結合であると見ることであつた。たとえば医術はキーツにとつて最初は、新しく体験された非合理的な世界と一致しないように見えたのだが、今や医術は大きな全体と関連を持つようになる。

“Were I to study physic or rather medicine again, I feel it would not make the least difference in my poetry ; ...”

「もし僕が医学または医術を勉強しても、僕の詩には何のかわりもないだろうと思つて。」⁽⁴⁸⁾

ここでは科学と詩は共存するものとして示される。ここで求められているものは硬化した秩序ではなく、生き生きした有機的構造でありわれわれの魂の中の素晴らしい世界である。

(三) 内部の眼——浪漫の世界に於ける認識の手段

先に挙げた “Why did I laugh to-night?” という詩では内部の “mystery” に向つて問が發せられたが、このように自己の魂に聞き入る際に、それに相応しい内部の視覚が獲得される。靈的な世界では、外部的、素材的世界における場合とは異つた認識の手段が得られなければならない。外部世界では事実と理性が立法者の役目を果たすが、靈的な内部世界では計算し得ない不思議な力が存在している。この点に

関連してわれわれはキーツがバーンスを次のように批評している個所
に気づく。

“Poor unfortunate fellow — his disposition was southern — how
sad it is when a Luxurious imagination is obliged in self defence
to deaden its delicacy in vulgarity, and in things attainable that
it may not have leisure to go mad after things which are not.”

「気の毒な不幸な男——彼の気質は南方的だった——空想力が到達出
来ないものを求めて身をこがすような状態には立到りないようにする
ため、豊かな空想力は自衛のために低俗なものにおつて、また到達出
来るものにおいてそのデリカシーを窒息させるように余儀なくされた
時、それは何とない悲しいことだらう。」

それに対してキーツは人々からは忘れられた眼を持つている。“the
forgotten eye”⁽⁴⁹⁾ それは「盲目な⁽⁵⁰⁾内部の眼」“his inward sight
unblind”⁽⁵¹⁾である。この内部の眼を働かせることによつて彼は全く新
しい種類の視野を獲得する。ここではキーツ自身が外部の世界におい
て到達出来ないものをあこがれて身をこがすのである。このようにし
て内部の眼を得たキーツは人間存在への門を叩くのだが、その門は暗
黒の通路へと通じている。“all leading to dark passages”⁽⁵²⁾ 然しそこ
へ踏み入ることは現世的な関心の領域を捨て去ることであり、あらゆる
地上的な困難を取り去ることである。そこには、より深い喜びがあ
り、より厳肅なものが感じられる。

“There is a deeper joy than all, more solemn in the heart,
more parching to the tongue than all...”⁽⁵³⁾

キーツは外部世界と内部世界が接触し、意識されたものと無意識な
ものが接触している境界点に立っている。この外部の世界と内部の
世界が結合するのを観察し、表現するためにキーツは骨身を削つた。
そのためには内部の眼は盲目であつてはいけない。即ち彼のヴィジヨ

ンを汚点に染まらぬように清らかに保ち、彼の内部の眼が盲目でない
ようにしなければならぬ。

“And keep his vision clear from speck, his inward sight
unblind”⁽⁵⁴⁾

キーツのこの決意は彼が内部世界を外部世界よりも、むしろ自己に
親近なものとして考えた、とつうことを示してつづる。J. H. Reynolds
宛の書簡には次のような詩がみられる。

“O that our dreamings all of sleep or wake
Would all their colours from the Sunset take:
From something of material sublime,
Rather than shadow our own Soul's daytime

In the dark void of Night. For in the world
We jostle —...”

「おお、どうかすべての眠つている夜の夢、醒めている昼の夢が、
その色彩を日没から、何か崇高なものからとつてほしいものだ。そ
れらの夢が夜の暗い空虚の中でわれわれの魂の昼を暗くするより
も、何故なら世の中でわれわれは押し合つ……。」

ここではキーツは夜の暗い空虚の前に立つて眩暈を感じている。そ
の測ることの出来ない深さが彼の魂の昼にさえ影を落すのである。其
処は暗い通路に通じている戸口のあるキーツの内部探究の地点であ
る。“all leading to dark passages”⁽⁵⁵⁾ とキーツは手紙の中で書いてい
る。その場合内部の眼はキーツにとつては測るべからざる深淵を覗い
て眩暈を感じさせ、一つの負担となる。

“It is a flaw

In happiness to see beyond our bourn —”

即ちわれわれが境界を越えて遠く見ようとすると、われわれの幸
福は曇らされるとキーツは云う。これは内部の眼を獲得した者が陥る
宿命的アイロニーだ。この内部の眼の重荷は大いなる暗闇の中で彼を

圧迫し、また境界を越えて見るようにキーツを強いた。この体験はそれが主観的なものの中に、また云い現し難いものの中に止つてゐる限り、それはいつも詩人の心を圧迫する。キーツは一八一八年三月の、

J. H. Reynolds 宛の手紙の中で次のような詩を書く。

“Dear Reynolds, I have a mysterious tale

And cannot speak it. The first page I read

Upon a Lampit Rock of green seaweed

Among the breakers ...

... I was at home

And should have been most happy — but I saw

Too far into the sea;”

「親愛なレノルズ、僕は神秘的な話を知つてゐるが、それを話すことが出来ない。碎ける浪の只中にある貝殻や海草の纏りついた岩の上に坐つて僕は最初の頁を読んだ。僕は寛いだ気持ちでいた。そしてとても幸福であり得ただろう——だが僕はあまりにも遙かに海の中を覗き込んだ。」

更に続けて次のようにいう。

“But I saw too distinct into the core

Of an eternal fierce destruction,

And so from happiness I far was gone.

...

Still do I that most fierce destruction see,

The Shark at savage prey, the hawk at pounce,

The gentle Robin, like a pard or ounce,

Ravaging a worm—”

「だが僕はあまりにもはつきりと永遠の恐ろしい破壊の根底までも覗き込んだ。それ故僕は幸福からは遙かに遠ざかった。……それでも

もなお僕はあの非常に恐ろしい破壊を見るのだ。荒々しく餌食を捕る鱈、とびかかつて来る鷹、恰も豹や山猫のように、虫をむさぼり食う優しい駒鳥などを。」

キーツはこのようにあまりにもはつきりと物事の根底迄覗き込むことを重荷として強く感じたが、然し一方先に挙げたキーツの手紙をわれわれは想起する。

“Though a quarrel in the streets is a thing to be hated, the energies displayed in it are fine; ... By a superior being our reasonings may take the same tone — though erroneous they may be fine. This is the very thing in which consists poetry;”

「往来でのけんかは厭うべきものだが、その際發揮された力は美しい。……より勝れた存在(人)にはわれわれの推理はそれと同じ色調を帯びてみえるだろう。たとえ間違つていても、それらの推理は美しくあるかも知れない。そして正にこの点に詩は存しているのだ。」

キーツがこのようにいうとき、彼はこの現象に対して「内部の眼」を所有するのである。われわれは外部の現象を、われわれの理性によつてではなく感情をもつて感じた時、始めて真実に理解することが出来るのだが、この感情の要素が内部の眼、または内部の光であるといつていいだろう。*Endymion* の中にも次のような個所がみられる。

“Feel we these things? — that moment have we stept

Into a sort of oneness, and our state

Is like a floating spirit's.

「どうしたものをわれらは感ずるか? ——その刹那にわれらはいわば一元的になり、われらの状態は飄々と漂う霊の状態になる。」

そのとき現象は始めて暗い、恐ろしいものの領域から、人生の楽し

みの領域“Amusement of Life”⁽¹⁰⁾へと置き換えられる。現象は暗黒の世界を脱れ、神秘の重荷を緩和することになる。“to ease the Burden of the Mystery”⁽¹¹⁾キーツは内部の眼を獲得することによつて謎めいた神秘なものの中に詩を発見した。キーツがワーズワースに関していつた言葉をキーツ自身に適用するならば、キーツはこの内部の眼によつて「暗い通路を探索している」のである。“explorative of those dark passages.”⁽¹²⁾この場合、内部の眼とは思考によつてよりは感情によつて到達されたものだ。たとえば“speculation”思索という言葉もキーツの場合には特有な意味で用いられているが、われわれは J. M. Murry がキーツの“speculation”について次のように云つたことを想い浮べるだろう。

“Speculation” is a sensation rather than a thought.⁽¹³⁾

- (1) John Keats, *Endymion* Bk. I, l. 691.
- (2) Ibid. l. 694.
- (3) John Keats, *Letters*; ed. by M. B. Forman. 1952 p. 139.
- (4) Ibid. p. 139.
- (5) Ibid. p. 71.
- (6) Ibid. p. 71.
- (7) Ibid. p. 67.
- (8) Ibid. p. 70.
- (9) Ibid. p. 139.
- (10) Ibid. p. 67.
- (11) Ibid. p. 67.
- (12) Ibid. pp. 303-304.
- (13) Ibid. p. 311.
- (14) Ibid. p. 70.
- (15) Ibid. p. 71.
- (16) Ibid. p. 71.
- (17) *Endymion*, Book III, l. 301.
- (18) Ibid., Book I, l. 453 ff.
- (19) Ibid., Book I, ll. 3-5.

- (20) Ibid., Book I, ll. 538-39.
- (21) Ibid., Book I, ll. 572-578.
- (22) Ibid., Book I, l. 633.
- (23) Ibid., Book I, ll. 636-644.
- (24) Ibid., Book II, ll. 707-710.
- (25) Ibid., Book III, ll. 1016-1018.
- (26) Ibid., Book IV, ll. 362-363.
- (27) Ibid., Book IV, l. 385.
- (28) Ibid., Book IV, l. 381.
- (29) John Keats, *Letters*. p. 317.
- (30) John Keats, *Ode on a Grecian Urn*, V.
- (31) John Keats, *On First Looking into Chapman's Homer*,
- (32) John Keats, *Letters*, p. 317
- (33) Ibid., pp. 316-17.
- (34) Ibid., p. 316.
- (35) Ibid., p. 316.
- (36) Ibid., p. 316.
- (37) Ibid., p. 284.
- (38) Ibid., p. 284.
- (39) Ibid., p. 284.
- (40) Ibid., p. 284.
- (41) Ibid., p. 284.
- (42) Ibid., p. 303.
- (43) Ibid., p. 316.
- (44) Ibid., p. 139.
- (45) Ibid., p. 139.
- (46) Ibid., p. 139.
- (47) Ibid., p. 172.
- (48) Ibid., p. 195.
- (49) Ibid., p. 196.
- (50) Ibid., p. 143.
- (51) Ibid., p. 194.
- (52) Ibid., p. 195.
- (53) Ibid., p. 125.
- (54) Ibid., p. 143.
- (55) Ibid., p. 126.
- (56) Ibid., p. 126.

- (57) Ibid., p. 126.
- (58) Ibid., p. 316.
- (59) *Endymion*, Book I, ll. 795-797
- (60) John Keats, Letters, p. 315.
- (61) Ibid., p. 139.
- (62) Ibid., p. 143.
- (63) J. M. Murry: Keats, 4. ed. 1955. p. 231.